ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2007 年 3 月 5 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045
東京都北区赤羽 1-48-3-203
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.302

3 月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安

■締め切り
2007 年 3 月 18 日（日）

■購読料・年会費
1200 円（年）
（切手 80 円× 15 枚）
郵便振替：東京 00170-1-18290

岡山発高知行き特急南風 5 号「アンパンマン号」（2007 年 1 月）

飯島富士男氏からのお便り

◆ふみの会 300 号おめでとう。◆年末の慌ただしいときに突然の会報でした。しかし、例年のバタバタと連日の大酒が祟り、年賀状つくりがやっと。身の回りのことは一切手つかずのまま 1 月を過ごし、2 月となり何かをと、先週、思い出したように社会保険事務所に年金手続きに行ってきた。退職時、同期よりも甚だしく少ない退職金に怒りを憶えたが、かといってどこにも怒りをぶつけるものもなかった。受付窓口で、月々の支給額を示されて、また、退職金のときと同じ怒りがこみ上げてきた。多くは人生の到達点か、納得をし、背中に喜びを漂わせながら引き揚げて行くのだろうが、私の背はどのようにうつっていたのだろう。◆この少ない年金からも税金がとられる。なんという国になったのだと更なる怒り・・・この手続きが老人への入り口と思うと怒りを越えて、切なくなり寿司やへ行き一気に酒をあおりフラフラと酔いを醒ましながら少し明るさの残る街を赤くなった顔を隠すように家路についた。◆早いもので、30 年が過ぎようとしているのですね。借金を遺したまま、職場が変わり、急に忙しいことになり失礼してしまったことを未だにひっかりながら過ごしています。いま、あらためて「300 号」を読ませてもらいました。吉田さんも重森さんの名はありませんが蒲原、藤川、塚原・・・という名前には覚えがあり（容貌はちと？ですが）、また、皆さん元気に過ごされていることを感じました。もう、街中で会っても気づかないかもしれません。わたしも眼を幾度か手術する羽目になり視力が落ち、よっぽど近くでないと判断できません。◆今後とも皆さんの活躍をお祈り致します。

未踏社（山口和朗氏）より、未踏第十九号（二〇〇七年一月発行）をいただきました。

夕日の木

蒲原ユミ子

ママが心配そうに言った。
「ユキ、やっぱりいっしょに行くわ」
おしゃれな白い帽子をかぶり、サングラスをかけたユキは強く首をふった。
「だいじょうぶ。リクがいてくれるから」
ユキは真っ黒な盲導犬・ゴールデンレトリバーのハーネスを握り、空元気のような声で言った。
「じゃあ、リク、『夕日の木』へ出発！」
そして、ゆっくり歩き出した。ママは、ふくらんだデイバッグをかついだその背中に叫んだ。
「こまったことがあったら、すぐ電話してね。ママ、ずっと待機してるから！」
ユキはそれにはこたえず、用心深く歩みを進めた。リクはご主人のユキに寄りそい静かに進んでいく。さわやかな5月の風が2人を通りぬけていく。

リクは3才の雄。まだ盲導犬に成り立てだけど、とても賢い。そして、ちょっとやんちゃ坊主。まだ育ち盛りの子どもと言っていいかも知れない。
きょうは、ユキ一家が引っ越す前に住んでいた町へ、そこにある『夕日の木』(ユキが子どものころつけたモミジの大木の名前だけど)まで冒険旅行なのだ。
そのモミジの木の風景は、春も秋も夏も冬もそれぞれよかったけれど、ユキは夕日の時間がとくに好きだった。空を五色にそめて沈んでいく太陽を背にたたずむモミジの大木は、美しい影絵のようで深く心にしみたものだ。あしたの天気と楽しいことも約束してくれるような。
『夕日の木』までは、電車で5駅、おりた茜駅まで歩いて40分ほど。普通の人にとっては、たいした距離ではないかも知れないけれど、目の見えないユキにとっては一生をかけるくらいの大冒険旅行なのである。
ユキはすらりとした22才。
3年前、大学に入ってすぐ交通事故で頭を打ち、視力をなくしてしまった。
青春の真っ盛りに「闇」という奈落に落ち、2年くらいもがき続けた。けれど、ママや友だちのはげましで少しずつ立ち直り、点字の勉強を始めたりした。そして、盲導犬の訓練所で2ヶ月間生活し、とうとうリクにも来てもらうこともできたのだ。
今向かっているユキの町の緑駅まで、ユキの足で15分。
このコースは訓練士さんとの練習で何回も歩いているけれど、外に出ると全身が緊張する。耳と全身でまわりの気配を感じながら歩いていく。
ユキは2回の手術で明るさは感じることができるし、建物のような大きなものはぼうっと見えるようになったとはいえ、一人で白い杖だけではとてもむずかしい。
だから、リクが来てくれてからは外に出るときのプレッシャーが50分の1以下に減ったような気がする。
リクはユキのためだけに生きて働いてくれる。ママに手を引かれていたときは、ママを犠牲にしているような気がしたり、自分が赤ちゃんのような気分になったりしたけれど。
リクはユキの大切な大切な相棒。リクと呼吸を合わせて進むのは、人生の一歩一歩をとてもていねいに歩んでいるようにも感じてうれしい。
ただ歩くことがこんなにうれしいなんて、不思議なほどである。そして、ハーネスをつけたリクと歩いていると、まわりの人々が自然に道をあけてくれる。子どもに、「あっ、もうどう犬だ！」と言われることはあるけれど。それくらいのことはどうってことない。
駅に着き、自動販売機の点字を読

んで茜駅までの切符を買った。

駅の階段がまだ全然なれていない。けれど、リクが階段の始まる前と終わるところでは必ずちょっと止まってくれるから、一足一足用心深くおりた。

ホームは3番。柱の近くで電車を待つ。きょうは平日だし、ラッシュアワーをさけたから人ごみは少ない。

電車が来た。降りる人を待って足を大きく踏み出して乗る。

電車が走り出してからユキはほっとし、(ああ、3年ぶりの電車だわ)と胸がふるえてきた。

そして、だんだん緊張が溶けてくると、ユキは電車の中の空気がとても温かくなごんでいることに気づいた。それはもちろん、エアコンのせいではなく、まわりの人たちの盲導犬・リクに向けられた優しい笑顔と関心だと感じた。ユキは感動して、ハーネスをぎゅっと握りしめた。

(リク、おまえはまわりにいる人もいやしてくれるのね!)

けれど、リクはじっと「ウエイト」(待ち)の姿勢でいるだけである。

茜駅をおりた。

ちょうどユキが中学生になった時に引っ越したので、10年ぶりである。

駅の建物は変わっていなくて、ユキはほっとした。

改札口を出て、いよいよ『夕日の木』まで徒歩遠足。たいしたことが起きずに到着できたら、正午前に『夕日の木』に再会できるはず。

けれど、ユキにははねのけてもはねのけても取りついてくる不安があった。

それは、小さいころのユキを知っている人に出会い、

「あら、ユキちゃん。目、どうしたの?」

と言われるかも知れないこと。この町では元気に飛びはね、いい記憶しか残っていないのに、今の自分の痛い過去を聞かれるのは何よりも嫌だ。

それでも、『夕日の木』に会いにきたのは、家の中にじっとしていることに耐えられなくなってきたから。一生、家にいることなんてできないし。

リクというかけがえのないパートナーも得たのだから、まず歩きださなくちゃあと心を決めた。茜町なら、行きたいところの道は全部頭の中に入っていて、リクとも歩きやすい。

駅を背にして、いよいよユキはリクと歩き出した。

商店街の手前のわき道をゆっくり登っていく。この道は、ユキたちがいた村への近道で狭いけれど、車が少ない。高校生たちが通う自転車通学コースにもなっている。今はどのくらいの交通量かわからないけれど。

歩き進んでいくと、ほとんど人影がない。

そのうち、大きなお寺の築山をまわるようになっている道に来た。1年に1回「お引き上げ」という行事があってその時は黒山のような人だかりがあったものだけれど、ふだんは静かでなかよしのマリちゃんと遊びながら通ったものだ。今も同じ静かな空気が流れている。

10分ほどで県道に出た。

ユキは心の中で、「いちに、いちに」とかけ声をかけて歩いていった。田舎のせいか、歩道にはほとんど人がやって来ない。でも、緊張はとけない。

この先に、高速道路ができ、地下道が新しくできたそうだから。ユキは来る前に町の観光課に問い合わせて教えてもらったのだが、ほかにも10年前の道路との違いとか工事中のものもないことを聞いてある。もちろん、『夕日の木』がまだちゃんと立っていることも確かめてある。

ユキとリクは、無事地下道もクリアし、ついに県道からの細いわき道に入った。

ここはもうアスファルトではない。地面のやわらかいクッションで足底の振動がやさしくなった。

ときは、うららかな春。まわりは若緑色の木々から流れてくるおいしい空気。

もう『夕日の木』まで、普通の人でも目をつぶってもいけるというくらい安全な道だ。

てくてくてくてく・・・

あたりには誰もいない。静かな空間となだらかな丘が広がっている。

ユキが子どものころは、この辺で男の子たちがよく草投げなんかして遊んでいた。女の子はたいがいおままごと。草や木の実や葉っぱのお皿がいくらでもあったもの。

今の子どもたちはどこへ行ってし

まったのかしら。誰もいなくてユキが歩くためには安全だけれど、子どもの声が聞こえないのはさびしい。

とうとう、ユキとリクは『夕日の木』に到着した。

ユキはそっとモミジの大木にさわり、

「ただいま」

と声をかけ、木をふりあおいだ。

木は春のまばゆい光の中、やわらかな黄緑色のモミジ葉が青空の中に美しくたたずんでいる。ユキには見えないけれど、心の中と体ではこの木の雄大さと大いなる母のようなたたずまいはちゃんと感じた。目の見える人よりも豊かに感じることができたとさえ思った。

ユキはリクに、「おつかれさま、ちょっと待っててね」と言い、ハーネスを放した。

そして、木に向かい、両手を深呼吸した。木のさわやかできれいな息吹がユキの体の中にしみこんでくるような気がした。

気持ちがよくて何度も何度も深呼吸しているうちに、体の芯に力がみなぎってくるようだった。

(ああ、わたしにもできることがいっぱいあるはずだわ。なんとしてでも大学にもどり勉強しなおそう!)

ユキは心を決めると、ほっと安心し、急におなかが空いてきた。時計にさわると、正午ちょっと前。予定通りだ。

ユキはは側でじっと待っていてくれたリクに呼びかけた。

「お待たせ。お昼にしようね」

まず、デイバッグからリク用のカップを出して魔法瓶から牛乳をなみなみついだ。リクの食事は朝晩の2回だけなので、お出かけの時は牛乳をやることにしている。まだ、育ち盛りのリクだもの。「どうぞ」と言うと、リクは飛びつくようにカップから舌でべろべろ飲み始めた。

それから、ユキはママが用意してくれたシートを敷き、弁当を広げた。おにぎりが3こと唐揚げ入りのおかず。これもママの手作りである。そろそろ「ママ」も卒業しなくては。

(今まで母さんに何でも頼りすぎていたわ。こんどから弁当も自分でつくれるようにしなくちゃあ)

と思いながら、ユキは大きな口を開けた。

お昼を食べ終わると、ユキにどっとつかれが出てきた。

リクと2人でこんなに遠いたびをしたのは初めてだし、目が見えなくなってからは初めての長旅だったから、つかれるのも無理はない。ユキはリクに言った。

「リクもつかれたでしょ。ちょっとハーネスを外して休もうか」

ふだんハーネスは家の中にいる時だけ外しているのだけれど、近くには誰もいないし、きょうはがんばったから「特別のご褒美」と、ユキは思った。

ユキがハーネスを外すと、リクは前足を伸ばしリラックスした姿勢で座った。ユキもリクに体をくっつけて横になり、ちょっとだけ休むことにした。

ところが、ユキは横になったとたん、深い眠りに落ちてしまった。

ユキは夢の中にいた。

青い海原をぐいぐいと力強く泳いでいるのだ。少しもつかれないし、どこまでも行ける。

泳げば泳ぐほど、力が湧いてくる。

なんて気持ちいいの! お日様が明るくてまぶしいくらい。

ユキは幸せではちきれそうだった。

夢からさめて、ユキはとまどった。

(あれ、わたしはどこにいるのかしら・・)

まわりはぼわっと明るくて暖かいけれど、海ではない。

ユキは今いる場所と今の自分を思い出してしまい、深いため息をついた。

けれど、すぐに思い直した。

(こんなにきれいで楽しい夢を見れたのは、この木のお蔭だし、また夢の中では走ることも泳ぐこともできるわ)

それから、やっとリクのことを思い出し、手探りした。そばに、リクはいなかった。

「リク!」

呼んでみたが、近くにはいないようだ。ユキは、ハーネスを外した家の中では必ず聞きつけて来てくれる口笛を吹いた。

けれど、リクはあらわれない。ユキに不安がよぎった。

(どこかへ行ってしまったのかしら。

ハーネスを外すんではなかったわ・・）

ハーネスをしている時は仕事中なので、主人のユキの側をぜったい離れないし、よその犬には見向きもしないように訓練されているけれど、外してしまったらもうふつうのやんちゃ犬だ。それもとても好奇心おうせいな。

ユキはリクを探しにいけない。

小一時間ほど待ったが、リクはもどって来ない。

（リクは自然の野山で過ごしたことがないはずだわ。山へ入って迷子になってしまったのかしら。まちがって銃でうたれてしまったのかも知れない・・）

ユキには悪い想像ばかりうかび、ハーネスを外したことを深く後悔していた。もうそろそろ帰らないと、夕方のラッシュアワーにぶつかってしまう。母さんにも心配かける。

ケータイは持ってきたけれど、電話するわけには行かない。ユキは、「大丈夫だから」と強く言って母さんを振り切ってきたのだから。ユキは心細くてたまらなくなった。

と、その時、ふと後ろの『夕日の木』に呼ばれたような気がした。ユキは木に近づいて抱きついた。ほっぺたを幹にくっつけた。ざらつく細かい木肌があったかい。だんだん、心が落ち着いてきた。

子どものころ、この木に何十回登ったことだろう。

このモミジの大木はしなやかで木の股がたくさんあり、すごく遊びやすいように枝が伸びていた。隣のマリちゃんと木の上でおままごとをしたこともある。

台風が来た時も、木からおりないで強い風を受け続け、荒海を航海しているような気分で得意になっていたことは、忘れられない思い出だ。

木にもたれ、楽しい思い出にひたっていると、ふしぎなほどユキは安心してきた。ユキは『夕日の木』につぶやいた。

「リクはきっと帰って来てくれるわよね」

すると、木の中からかすかに、オオオーという音が聞こえた。

ユキには、（だいじょうぶだよ）と言ってくれているような気がした。それは、深い地面から吸いあがってくる水の音だったかも知れないが、ユキには子守唄のようにも聞こえ、母なる木に抱かれるようにして身をあずけ続けた。

そのうち、かすかに、「クウン・・」という声がして、ユキの太ももに懐かしい感触があった。

「リクッ！」

思わずふり返ってリクを抱こうとしたとき、顔にガツーンと強い衝撃があった。木の枝にでもぶつかったのだろう。ユキはかまわずリクを抱きしめた。

「リク！」

クウンクウンクウン・・・

リクははずかしそうに甘え声をだしながらも、べろを出し、「ハッハッハッ」とはげしい息づかいだ。すごいスピードで走ってもどって来たのだろう。ユキはハーネスをつけると、またカップを取り出し、残りの牛乳を入れてやった。リクはあっという間に飲み干した。ユキは笑った。

「リク、よっぽど楽しいことをしてきたのね」

と、その時、ユキの首筋にだらりと冷たく垂れてきたものがあった。思わず指でぬぐうと、それは血だった。

ユキは目が見えなくなってから、つい見えたときと同じ急な動作をしてしまい、家の中でも血を流してしまうことがけっこうあった。ユキはあわてず、救急袋からオキシフルを湿したコットンをだしてほっぺの傷をそっとなんども拭いた。そして、傷の大きさを指でたしかめ、それに合ったバンドエイドを貼った。

最後に、バンドエイドの上にちょっと髪をかぶせて帽子を深くかぶった。多少目だつけれど、気にしない気にしない。

すばやく帰り支度をすませ、リクのハーネスを握った。

「じゃあ、行くわよ！」

リクはもうすっかりユキの力強い相棒の顔になっている。

ちょっと歩き始めてから、ユキは『夕日の木』をふり返った。

西陽が傾き始めてはいるが、まだ夕日には少し時間がある。けれど、明るい『夕日の木』の丘はふしぎで優しいエネルギーのようなものに満ちあふれていた。

ユキは大きく息を吸いこみ、木に、

「じゃあ、また来るわね」

と言って、歩き出した。

下津

中井　豊

紀州は蜜柑（いわゆる「温州蜜柑」）どころとして一般に知られている。しかし、和歌山県の地元では下津から湯浅まであたりが本場である。いずれの土地でも、西側の紀伊水道に面した低い山々に植え付けられた蜜柑が「潮風を受けて味がよい」と言われている。

小学校一年生を終えるまでの五年間、私は紀勢西線（今の紀勢本線）下津駅の官舎にいた。下津港には丸善石油の精製所があって、タンク車専用の鉄道線が敷設されていた。駅の構内にはドラム缶が並べられ、日本通運のトラックや三輪自動車が出入りしていたことを思い出す。国鉄の駅に貨物車用の引き込み線と鉄道貨物を積み重ねる舎屋があって、傍らの広場に日本通運の黄色いトラックが出入りする……。五〇年ほど以前、よく目にした光景である。

ドラム缶には蓋のないものがあって、コールタールが入っていた。コールタールは石油精製の副産物として出来るどろどろした黒い液体で、冷えると子どもが立てるくらいの固さになる。その頃、他所者で友達のいなかった私は、ドラム缶に入ったコールタールの上を飛び回って一人で遊んだ。中に柔らかいのがあって、ずぶずぶ沈み、下半身まっ黒になって家へ帰り、石油で洗ってもらったことがある。

のんびりした時代で、日本通運のトラックの助手席に乗せてもらって知らない所を廻ったこともあった。まだ自家用車や電話のある家はほとんどなく、家に通じる道には自動車が入れるだけの幅さえなかった気がする。自動車が家の前で停車する光景も記憶にない。したがって、トラックで他所へ行くというのは得難い体験だった。

下津駅の踏切手に奥田さんという人がいて可愛がってもらった。子供には知る由もなかったが、お酒が好きなため、父と仲がよかったらしい。列車は二時間に一本くらいだったろうか。この人が踏切番に出かける際、私もくっついて行った。その帰り、どういう弾みにか、私はプラットフォームから転落して線路で頭を切った。

勤務で駅にいた父は、日本通運のトラックを出してもらい、隣町の病院まで私と同乗した。私は頭に当てた布を自分で押さえ続けた。父は私を送り届けて、そのままトラックで駅へ戻った。そして、次の汽車で母が迎えに来た。頭を数針縫う怪我で、その傷跡は今に残っている。傷の事より、父が子供を病院へ連れて行くようなことをするということが私には非常な驚きだった。まして勤務中だった。頭を手で押さえて人にお辞儀させることの他には、父が子供に触れることはなかったし、口をきくこともなかったからである。

幼稚園へは初めのうち、集団で通った。ある朝、向こうから来た自転車に衝突し、鼻梁に怪我をした。通園する道の傍らに工場があって、どうやら厚紙を石油ピッチに浸し、防水シートを製造していたようだ。もうもうと上がる蒸気とピッチの臭気が漂っていた。

運動会の練習では、どうしても集団行動からはみ出すので、一人だけ教室に移され、大きい画用紙を与えられて、得意だった汽車の絵を描かされた。「この絵は幼稚園に残す」と言ってもらったような気がする。周囲と同じ行動がとれず、違う風にしないと不安になるのは、この時代には既に始まっていた。遅れて家を出、途中で弁当を食べ、そのまま家へ帰ったこともある。

学芸会は映画館の「弥生座」で開催された。「花咲か爺」の劇で、ドングリ眼で丸顔の宮本君が「正直爺さん」の、私が「嘘つき爺さん」(?)の役だった。この配役に、何故か内心《やっぱり》という気がした。臼を蹴る場面があり、本番で思い切って蹴ると、臼が舞台からころがり落ちた。

町の映画館は「弥生座」一軒だけだった。日本映画だけを上映していたらしく、ここで観た覚えがあるのは、原爆映画一本と「弓張月」という東映映画一本のみである。封切りの「ゴジラ」は、母に連れられて海南市で観た。下津町では観ることはできなかった。

《いよいよ勉強できる》と期待に胸を膨らませて下津小学校へ入学した。この時、自分が色弱であることが初めて検査で判った。それは兎も角、なかなか「勉強」は始まらず、ガッカリし、あきらめて放課後を待たずに家へ帰ってしまった。このような直線的な性癖を、担任の田尻先生は、「ゴーイング・マイウェイ」という当時流行った映画の題名を引き合いに出し、擁護して下さったらしい。

この夏休み、官舎の改築があり、山の中腹にあった長屋へ引っ越した。東向きだったため、早々と朝日に叩き起こされた。しかし、港の海面に石油工場と船の明かりが反映する夜景は忘れがたい美しさだった。それを描いた絵は展覧会へ推薦していただいた。田尻先生は美術が専門だった。

田尻先生の理解に支えられて、登校拒否にもならず、私は無事に二年生から湯浅小学校へ転校することになった。父の転勤に伴って、駅にして南へ五つ先の湯浅町へと引っ越したのである。

下津は天王寺駅から国鉄(今のJR)阪和線に乗り、和歌山駅を経て四つ目の駅だった。その間に「宮前」「黒江」「冷水浦」の三駅が後に作られた。下津町(市町村合併で海南市に組み入れられた)には長保寺という紀州徳川家の菩提寺があり、春は桜が楽しめる。

混沌市凡日録　２３

必殺！電撃娘

蒲原直樹

鳥網翔子はその日の朝、不思議な体験をした。ベッドから起き上がり、寒かったのでサイドテーブルのリモコンを取ってエアコンのスイッチを押したが、なんの反応もなかった。仕方なくパジャマのまま起き上がり、ガウンをまとって姿見の前に行き、くしゃくしゃの髪を直そうとドライヤーをつかんでスイッチを押した。とたんにドライヤーは「ボン！」という音を立てて煙を上げ、動かなくなった。

「安物はしょうがないねえ」

翔子はそう思いながら台所に行った。テーブルには昨夜の一人宴会のあとが乱雑に残っている。ビールの空き缶とスナックの袋をゴミ箱に放り込み、冷蔵庫を開けようとドアの角に手を触れると、今度は「ゴン！」という音を立てて冷蔵庫が停まった。ドアを開いてみると内部のランプが消えている。なにか変だな、と思いながらも翔子はミルクパックとサラダ、チーズを取り出してテーブルに並べ、グラスにミルクを注いでそれを電子レンジに入れ、電源を入れた。するとまたもや「ビキッ！」という音を立ててレンジが動かなくなった。

「停電かしら？　……なんだか変ねえ」

翔子は仕方なく冷たいままのミルクをテーブルに戻し、シリアルとサラダの朝食を済ませた。

寒いまま素早く身支度を済ませ、翔子は出勤した。渾沌市最南部逆木駅から混沌駅へ向かう野々田線はその日も混んでいた。かろうじて吊革につかまった翔子は、ほどなく誰かの手が自分の尻のあたりに触れるのを感じた。グラマーを通り越して太めの翔子は痴漢にとって狙い目らしく、いつもはヒップタッチくらいは我慢するのだがこの日はむかついた。

「なに、この手は？」

翔子が後ろの男の手首をガシッとつかんだ途端、青い火花が飛び、鋭い悲鳴が上がった。翔子に手首をつかまれたまだ若いサラリーマン風の痴漢は、そのまま床に倒れて泡を吹きブルブル震えていた。

（え？）

翔子は「自分はなにもしていないのに」と思いながら痴漢を見下ろしていたが、終点の混沌駅に着いたので黙って電車を降りた。朝からのゴタゴタで数分の遅刻だった。オフィスのロッカー室に駆け込み、制服のボタンを閉じながら自分の席に飛び込んだ。しかしセクハラで有名な部長がこのチャンスを見逃すはずはなかった。

「鳥網くん、いけないねえ」

部長はにごった声を出しながら翔子の背中に回り、ねとついた手で肩を触ってきた。

「女子社員は定刻の二十分前に来て床掃除、湯沸し、生け花の水やりなど環境整備の仕事があるだろう。それなのに君は……」

言葉の途中で青い火花と「ヴァシ！」という轟音が起こり部長は床に転倒した。

「部長、どうしたんです！」「だいじょうぶですか？」

周囲の男子社員があわてて抱き起こしたが、部長はすでに人事不省だった。

（わたし、関係ないもん）

翔子は騒ぎにかまわず、仕事を始めるためにパソコンの電源ボタンを押した。それから後は何が起こったのか、翔子の脳裏に映ってはいたものの、それが本当のことなのかどうか自分でも分からなくなるのだった。

翔子の目の前の液晶画面が白く光り、不自然にぐにゃっとねじれた。それからパソコンの上に金色の火花が飛び、「しゅをっ！」という音がして冷却用の穴から白煙が上がった。それだけではなかった。翔子の隣りの机のパソコンでも「ぼむっ！」という音とともに真っ白い光と煙が立

ち昇った。その音と煙はさらにその隣りからも上がり、ドミノ倒しのようにオフィスの端から端へと進んで行った。数秒で翔子の部屋のパソコン十数台が破壊された。あとから聞いた話だと、会社のサーバもあまりの過電流に一部電源を破壊され、雷サージ防御装置によりかろうじてガードされたらしい。

「いったいどういうことなんだね、これは？」

気の小さい課長は半ば呆れ、半ば恐れながら翔子にこの事態の説明を求めた。しかし翔子に応えられるはずがなかった。

「……もしか、静電気……？」

「静電気？」

翔子の小さな声を課長は聞き逃さなかった。

「これだけの大被害を起こしたのがただの静電気だというのかい？……それはいくらなんでも、ありえないだろう」

「……」

翔子は黙り込んだ。しかし自分が強度の静電気体質なのを翔子は知っていた。中高生時代、冬になるとあっちこっちで火花を散らしている翔子を見て友人たちがつけたあだ名は『ピカブー』。「翔子の電撃は（ポケットモンスターの）ピカチュー並み」というわけだ。

科学者に言わせると俗に言う静電気体質というものはなく、単に着衣の素材・組み合わせの問題だそうだ。アクリルなど化学繊維とビニール系、あるいはウールの組み合わせで静電気が発生しやすくなると言う。それを聞いて翔子も自分の衣服を工夫してきた。にもかかわらず秋冬の「電撃娘」ぶりにはほとんど変化がなかった。彼女の静電気には特別の要素があるとしか考えられなかった。やむなく翔子は日常的に木綿の手袋をはめ、静電気キャンセル素材を持ち歩いていた。しかし短大を出て社会人として活動しだしてからなぜか静電気体質は収まっていたのだ。それがどうしてこの日の朝突然に、異常に拡大されて再現したのかはよく分からなかった。

「まあ、システムは保険がかかっているから一週間もあれば復活できるだろう。でも、作業途中に消失したファイルもたくさんあるからなあ、二度とこんなことがあっては困る。静電気というなら、その原因を含めてなくしてもらいたい」

「わかりました」

悲惨な有様になったオフィスの片付けに終日追い回され、翔子が会社を出たのは九時過ぎだった。会社の玄関を出て、最初に翔子は二重につけた手袋でハンドバックから携帯電話を取り出した。そしてそこでハッと気づいた。

（忘れてた……いや、思い出したくないから記憶から消去してたんだ！）

一昨日、翔子が彼氏のマサルに電話しようとするとずーっと話中だった。やっと通じたと思ったら留守電になっていた。なんだか様子がおかしいと思っていると、昨日の夜、親友のミチルからマサルが知らない女とホテルに入るのを見た、と報せてきたのだ。翔子は悔しくて昨夜は泣きながら一人で飲み明かしたのだった。それを思い出した途端、翔子は自分の体内にとてつもないエネルギーが沸き起こるのを感じた。

駅前商店街を歩いていくとモヒカン頭のグループが声を掛けてきた。

「おねえちゃーん、あそばない？」

翔子が無視すると、

「なんでえ、気取ってんじゃねーよ、ブスデブ」

モヒカンたちは口々にののしり、一人が翔子の肩をつかもうとした。翔子は右手の手袋を引き抜き、素手でモヒカンの腕をぎゅっと握った。大柄のモヒカンは青い火花とともに空中に舞い上がり、あぶくを吹いて歩道に倒れ、昏倒した。周囲から大きなどよめきが起こったが、翔子は無視して駅へ歩いた。マサルのうちは駅の反対側、西口団地の中にある。

（少しもてるからって平気で浮気しようなんて、そういう根性は叩きなおしてやらなくちゃ……女の怖さを思い知らせてやる！）

手袋をしながら唇をかみ締める翔子の背中には、青白い稲妻がバチバチと音を立てていた。

青い波頭と白い龍

第九回

藤川博樹

■新歓・葬送ソナタ

誰かが、カセットのスイッチを入れた。ショパンのピアノソナタ第２番「葬送」が鳴り出した。冒頭の和音が鳴り響くと、村木が「わお」と言って飛び出してきた。第一楽章の出だしのホロヴィッツの和音はピアノであってピアノとは思えないような聞いたこともない腹に染みる音だ。第３楽章の葬送行進曲に入ると背後から死に神が迫ってくるような背筋が寒くなるような恐怖を感じてしまう。しかし目をそらすことができず、手を止めて聞き入ってしまうのだ。

村木や氏家、無家が黙り込んでショパンの葬送ソナタを聞き入っているとき、時間は止まっていた。室内のしんと凍りついた空間の中をピアノの旋律が流れた。作業は止まり、仕事は全く進まなかった。

「仕事しましょうよ」

大田綾子が立ち上がって、カセットのボタンを押し、ガタンと言って時間が流れだした。綾子は前に学連の執行委員としてはたらいていた橋本とつきあっていた。しかしこのころ綾子の心は書記次長で財務担当の望月の方に傾きつつあったのだが、誰も気付かなかった。

新入生歓迎ゼミナールの準備が始まっていた。学連として新歓ゼミをやるのは初めての試みだった。各大学でやらないで、学連として首都圏の学生を対象に文化事業をやろうというのは壮大な試みだが、はたしてその意義があるのかどうか、わからないところもあった。学連が政治運動の旗ふりをするだけでなく、文化事業をやるのだという存在意義を示す意味もあった。規模が大きい文化事業になると予算的にも準備期間から言っても、各大学単独では無理な面もある。学生自治会というのは毎年学生が入れ代わるので、個々の大学の学生が責任を持って長い期間準備して取り組むというのは不可能だったからだ。

学連の事務所の中に、新歓ゼミ担当の机が設けられ、各大学から文化担当者が集まって準備を始めた。いろんな学問分野の学者に、政治や経済や文学の講義を頼んだ。メインの会場である体育館での出し物には有名なグループであるダカーポに出演を依頼した。早大のロックバンド、都立大学のオーケストラが出演して演奏する予定だ。メイン会場での目玉は、作家五木寛之の講演だ。

学連での新歓ゼミ担当に、副委員長の河原が専任で就き、実行委員長になった。日展の公募展の一つに、北海道の青年の部の代表に選ばれたこともあるという、優れた絵の才能の持ち主である。

都内の活動家を集めた準備会で、河原副委員長は言った。「今、五木寛之に講演を依頼する手紙を書いています。もし、実現すればぼくの手紙が五木寛之の心を動かしたということです」

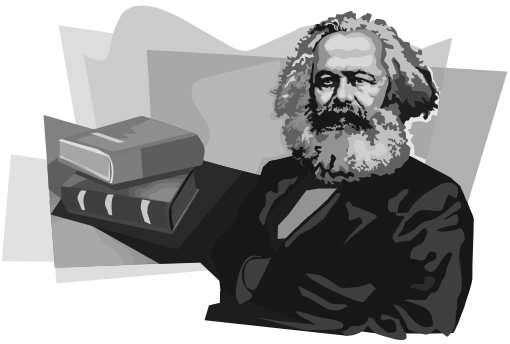
この発言は、素朴な学生たちにうけていたが、河原の手紙は心を動かさなかった。

氏家副委員長が、事務関係一切を準備した。大学の会場の手配、予算、人間の動員や手配配置などである。

常三たちの担当者は、あちこちの大学の文化サークルに声をかけ、さまざまな企画・イベントを準備した。体育系サークルは、サッカーの岡野俊一郎に講演を依頼した。この企画は学生運動とはほとんど関係なかったが、最も成功した企画の一つで、熱心なサッカーファン、個人的な讃美者で大きめの会場が都内各地から集まった学生で埋まった。文学同盟

の紹介で、明治大学の吉田という学生が学連にやってきた。文学のゼミを企画に入れようということで、中野健二を講師として立ててきた。学連の執行委員たちはほとんど文学には縁がなく、常三も知らなかったので、もっとインパクトのある講師を出せと注文を出した。吉田は一週間後にやってきて、霜多正次に依頼したという。「これなら文句ないでしょう。現代日本の最高の作家ですよ」

新歓ゼミの直前になって、急に実行委員会がにぎやかになった。実行委員会を補強しようとして何人かの活動家が動員され、各大学から派遣されてきた。それぞれ実力者であることは間違いなかったが、氏家は、「おれ、船頭多くして舟山に登ることを心配してんねん」と言った。全学連や共産党の上のえらい人たちは、実行委員会の強化イコール、実行委員の幹部を補強することだと考えた。これはレーニンの「大衆への政治の注入」という考え方と似ている。大衆が自ら自覚し目覚めることはあり得ないので、真実に目覚めている前衛党が大衆に政治を注入しなければならないというのである。



それまで、こつこつ準備してきたさまざまな講演や企画がなにかこせこせした、矮小な行事になってしまったように感じられた。氏家は、もう全体の進行を見なかった。ただ、会場の椅子の手配や、消防署、保健所への諸届け、チケットの準備や宣伝といった事務的な手続きに集中した。七月の参議院選挙が近づいていて、現場の常三たちが知らない間に、共産党の候補者が新歓ゼミの中の行事の一つとして講演会をすることが上の方から決められた。

新歓ゼミ当日は、ほぼ予定通りのスケジュールですすめられ、まずまずの成功だったが、メインの出し物で混乱があった。ダカーポの公演は野外で行われる予定だったが、あいにくの雨模様で、講堂での演奏の準備がすすんでいた。午後から雨が上がったので、川原実行委員長の決断で、急遽屋外に会場が移された。この決断が裏目に出て、演奏が始まったとたんのにわか雨。あわてて楽器やアンプなどの器具が片づけられ、公演は中止になった。ダカーポ側のスタッフ、特にバンドマンが「こんなのはあり得ない」とかんかんになって怒っているという話が伝わってきた。

音楽事務所が間に入って、話し合いの席がもうけられた。学連の委員長が背広にネクタイを締めている姿を、常三は初めて見た。川原実行委員長、文化部の担当として常三も出席した。ダカーポは、ファンに悪いイメージを与えなかったかどうか、それだけを心配していた。ミュージシャンは、楽器が雨で傷んだので、それなりの補償をしてほしい怒っていた。音楽事務所の中年の担当者は温厚な人で、その場の話し合いは短時間におだやかに納まった。あらかじめ島委員長と音楽事務所で話をつけておいたように、演奏は中止になったにもかかわらず、出演料は満額払われる事になった。

共産党の講演会の方はもっと大変だった。各大学に動員命令が下されたが人が集まらず、さんざんだった。広い講堂で、少ない会衆。理論家として有名だった学者タイプの候補者は、かんかんになって青年学生指導の担当者をしかりつけた。担当の高田氏は、講堂の外で顔見知りの活動家をつかまえ、「お前なにやってんだ、すぐに人を集めてこい」と一喝した。腕をつかまれた小林君は、二の腕が痣になっていたという。「オレそれから二度と、講堂の方には近づかなかったよ」

新歓ゼミが終わってから、著作権協会から連絡が来た。当日演奏された楽曲について、著作権使用料が発生するので、演奏された曲のすべてのリストを出せというのである。まさか、当日演奏されたシューベルト「未完成」にはさすがに著作権料は

発生しないだろうが、ロックバンドなどが演奏した楽曲には届けが必要で、著作権料の徴収額については協会が判断する。用紙が届き、川原は適当に楽曲を書き込んでいたが、とちゅうで面倒くさくなって投げ出した。後日、文化部の大田綾子に言われて、またペンを採ったが、どうにも最後まで書き切れなかった。二、三曲で何を書いたらいいかわからなくなる。その後、何度か協会からどうなっているのかと問い合わせがあったが、川原副委員長はそのたびに用紙を取り上げるが、どうにも書き切れなかった。

　川原副委員長は、実務能力の方は今一つだったが、新歓ゼミの打ち上げの席で、ハーモニカの演奏をしてみせるなど大活躍だった。「夕焼け小焼け」「ふるさと」などなじみのメロディーを一通り演奏した後、普通サイズの半分の大きさのハーモニカを取り出して演奏し、さらに半分、さらに半分と、手品のようにポケットから次々と小型のハーモニカを取り出した。最後は音を吹き込む穴が三つしかないようなキャラメル大のハーモニカを取り出して、この場合手でつかめないので口の中に加えたまま起用にメロディーを演奏した。これには驚かされ、拍手喝采だった。

　常三が全学連の文化担当の執行委員と会議で同席したとき、彼は静岡から派遣されて将来教員になるつもりだったのだが、川原を評して、芸達者で演説もうまいとほめていた。常三が「絵も描けるし、ハーモニカも吹ける」というと、彼が「ハーモニカも吹けるし、ほらも吹ける」と応えて二人で笑った。ほらが吹けるというのは、大衆を煽動するときに重要な能力だ。

　その後、すぐに参院議員選挙が始まり、絵の才能のある川原は後援会の広報誌づくりに駆り出された。まだ、ワープロのない時代で、すべて手書きで版下をつくってオフセット印刷するのであるが、川原の字は「絵のように」うまい。常三も川原と一緒に新宿の後援会事務所に通って、文化部関係の学生の組織をおこなった。

　青年学生担当の高田さんは、毎朝地域の青年部や労働組合の部署の幹部を集めて、簡潔な指導と意志統一をおこなった。応援していた候補者は落選してしまったが、「次回はもっといい候補者を応援したいな」と青年学生担当者同士で話し合っているのを、選挙の後片付けに事務所に通っていた常三は聞いた。新歓ゼミでの講演会の失敗のことがよほど応えていたようだ。

　常三は、学連の執行委員となって大学の授業にも出ず、中野坂上にある学連の事務所に一年間通ったが、結局、国政選挙が二度もあり、開催時期の変更時期に重なって二度も学連の大会があった。初の新歓ゼミの開催があり、それらの準備に追われた一年間だった。いったい何かが変わったのか、それはわからない。いったいレーニンの言うように、上から政治を注入して世の中が変わるのかどうか、自分の経験を振り返って否定的に考えるしかなかった。何かもっと大きな背後の力によって世の中は動いていて、自分たちが何を考え何をしても、意図的に動かせるものではないと常三には感じられた。世の中を動かせるものがあるとしたら、それは人々の意識の背後のもっと深いところにあるゆったりとして広大な川の流れのようなものだ。

ゲイジュツについて

塚原由紀夫

思うに近代以前は、芸術も生活も同じ概念だったような気がしている。昔は芸術などというものはなかったし芸術家もいなかった。いたのは芸人や職人で、おそらく百姓でさえも広義には職人であり、その労働はある種の芸事の一つであったろう。芸術などという概念は、相変わらずその実態たるや、よく分からない迷妄の世界だけの話ではないのだろうか。

一般に言う「芸術」とは人々が夢を見たり、求めたりしている一切の抽象物、具体物を作りだそうとする努力、また作り出すための実際の作業、そして作られたモノだと思っている。そう考えれば創作も観賞もまったく同じ行為だろう。

昭和文学に異彩を放った文芸批評家の小林秀雄は文学者というより一般美学を追求していた思想家だったが、出発した最初から死にいたるまで常に考えていたことはただ創作としての文学のことばかりではなかった。

文壇にデビューした最初の論文が「様々なる意匠」で、これは２７歳のときに書かれたものだが、その中で「芸術家にとって芸術とは感動の対象でもなければ思索の対象でもない。実践である」と簡明に述べている。実践とは誰にとっても生活そのもののことであり、その人の人生のすべてだろう。換言すれば芸術とは人間の活動一般に問われるエッセンスのようなものだということか。小林も、若い頃は「芸術家」とは書いているが、これが晩年にいたるに「芸術」も、徐々に世俗的に敷衍され一般化され、そのような言葉は恥ずかしくめったに言い出さなかった。まして「芸術家」などという近代に造語された特権的言葉はほとんど使わなかった。後年書いた非常に短いエッセイの中に「花の美しさなどというものはない。美しい花があるだけだ」という一文があるが、これも芸術とか美の所在を、なにか架空の観念物にしておくのではなく、どこにでも転がっている人々の実践と生活においていることの表れのように思われてならない。これ以上の偏見のない人間賛歌はないだろう。人間賛歌とは生活への信頼であり、生活者のそのままの精神を賛美していることに他ならない。

小林秀雄は、インテリという近代の幻想を嫌ってやまなかった。知ったかぶりや、知識人を嫌った。芸術家を嫌い文学者を嫌っていた。自分も一介の「文士」以上には認めさせなかった。最後は出版文化、ジャーナリズムまで馬鹿にしていた。出版と文学がまったく分野違いであることを彼ほど力説した人間はいない。記録された言葉、すなわち図書と「文学」は違うものであり、この自明なことを彼ほど、こんこんと説明していた文学者は他には一人足りともいないのである。

小林秀雄が好きだったのは芸や職に打ち込む実践家だけだった。黙って実践している芸人や職人、さらに敷衍すれば働いている多くの民こそ生活の達人であり人生の達人であることを見抜いていた。良きもの、美しいものを求めて、ひたすら生活している人々の刻苦する日常の中にこそ芸の根源を見ていた。少なくても耳あたりよく科学風に凝らされた凡百の理屈の中に芸術は存在しないということを生涯、主張していたように思われる。つまるところ芸術とは結果論なのかもしれない。同時代や本人には、自分が何者であるのか、誰も評価できないことなのだから、創作者は何一つ説明するべきではないとすら思っている。実践あるのみだ。芸術家とは芸に打ち込んでいる、その人のことに他ならないだろう。

小説・一人ぽっち

内田幸彦

(十六)易者

大晦日に宿直をして元旦の朝帰ってきた父・梅三郎は、

「寒い。蒲団を敷いてくれッ！」

と床にもぐり込んだまま、急性肺炎で一週間の患いで他界した。

給料が入らなくなる。食糧も配給だけではやって行けない。そこへ、一九四六年（昭和21）の新円切り替えに伴う旧円の切り捨て。これが外田の家の没落のキッカケとなった。

「彦一、お前は大きくなっても儂（わし）らの事は何も心配しなくていい。お母さんとの生活は死ぬまで大丈夫だ。用意してあるからな。だから、お前は自分の事だけを考えろ」

父の生前、この言葉を聞いたのは二度や三度ではなかった。

父の思いはもろくも三年以内に崩れた。運のない時は仕方のないもので、二十八年も勤め上げた父の退職金まで瞬時に消え去ったのである。

彦一の進学を思い、母が退職金をそっくり銀行に預けたのが悪かった。でも、誰がこんな異常事態を想像できたであろう。運が悪いとしか言いようがない。これが外田の家の没落の引き金となり、実に四十数年も彦一が地べたを這いずり回ることになるような貧乏となった。

父の死以後、母はめっきり老けた。白髪が増え、目も悪くなり、皺が増え、以前の面影は一変してしまった。父の死と、彦一の不安定な仕事の所為（せい）だった。

父・梅三郎は母が好きになり、外田家の養子に入ってまで結婚した。父の家は下級武士であったため、母の家は町人だということで、結婚に大反対だった。二人はそれを押し切ったのである。

母の父・辰吉は細面で鼻の高い上品な人で、歌舞伎役者のようないい男だった。女の子は父親に似ることが多いという。母も小柄な美人だった。母方には美人が多く、宝塚の女将の卵や、芸者など水商売の女（ひと）が多かった。母が学校の先生となって通勤する袴姿を父は見初めたらしい。

その母も今はやつれて老婆じみ、観る影もない。責任を感じているが、泥沼に踏み込んだようにどうにもならない自分に、彦一は歯痒くもあり、悲しかった。

母も彦一も最近は話すこともない。母にすれば、話すと愚痴になると思うだろうし、彦一も何を話しても弁解になると口をつぐむ。本を読んでもモヤモヤした気分で頭に入らないし、外出するにも「また遊んでる」と世間の人が思いはしないかと躊躇する。昨日から煙草が切れて買う金もない。頭が呆けるほど吸いたい…。

そんな或る日、母は、

「毎日そんな陰気な顔をしてないで、これで映画でも観ておいで」

と千円札を握らせてくれた。目を腫らし、縫い物をした貴重な金だ。おろそかには使えない。《兎に角、昨日から切れている煙草を買おう。後は歩きながら考えよう》と久し振りに明るい気分で彦一は家を出た。

煙草もピースから新生に落とした。でも一服吸うと、頭がジーンと痺れるほど美味かった。釣り銭で何を買う？　お金を長持ちさせるのは本だが、本を集中して読む気にもならない。それで、足を駅へ向けた。

駅前の本屋さんと相互銀行の間に形ばかりの幕を張り、粗末な見台に狸のような顔の易者が坐っている。《そうだ。「当たるも八卦、当たらぬも八卦」だが、ヒントくらいにはなりそうだ》。

彦一は煙草の釣り銭全部を見台に置き、

「これだけしかありませんが、この分だけ観て下さい」

「ほう、何を観て欲しいんだね?」

咄嗟に彦一の口から出たのは意外にも商売の事だった。

「商売をしたいんですが、どうでしょう?」

何を考えてもまとまらず、商売を考えていた訳でもない。切羽詰まった思いがそう言わせたのである。

易者は彦一の顔と手を交互に眺めながら、

「ふーん。今まで大分苦労してますな。でも、明るくなってきている。東の空が白むようにな」

彦一は思わず叫んだ。

「本当ですかッ! やれますか僕でもッ!」

「そりゃ君の努力次第ですね。ただし、言っときますが、あなたは卯年で色が濃い。これだけは気を付けて。あなたが女に手を出すと足許からひっくり返りますよ。それさえ気を付ければやれるのじゃ。あなたは他人に嫌われないから」

神の啓示を受けたように、もう彦一は商売する気になっていた。《やってみなけりゃ判らない》と、彦一にはそんな考えがある。懸命に努力して、それで失敗ならそれはそれで仕方がない。

普通なら、資本金・経験・自信などを熟慮して乗りかかるのだろうが、彦一は二キロ近い道を何も考えずに飛んで帰った。彦一には細かい事は気にならない大胆さが潜んでいた。

「お母さんッ! 僕、商売をするッ!」

「商売? 資本(もと)もないのにどうして出来るの!」

「やるんだ。やってみなきゃ判らないじゃないか」

品物を右、左に売れば儲かるものとばかり思っていたし、三十前後で独立するという世間への見栄もあった。

(十七)船出

彦一は商売を始めることにした。母は暗い顔をして何も言わなくなった。言っても中止はしないだろうし、このまま就職できるかどうかも判らない。きっとそんな思いで黙ってしまったのだろうと彦一は思った。

彦一は独立するという誇りもあり、一番仲のよかった矢野に資金を頼もうと思った。彼なら貸してくれるだろうと甘い期待があった。

いつもなら下心がないから、何でも気軽にしゃべれたが、イザとなると借金のことは切り出せなかった。お金に関する話題にならないかと機会を待った。だが、話はあらぬ方へ。

彦一は焦った。意を決し、矢野の表情を気にしながら切り出した。

「実は今度、商売をしたいので、資金を貸してくれないだろうか」

今まで明るく喋っていた彼は急に険しい顔になり、

「商売? 止めとけ止めとけ。危ないぞ。それより、仕事を探せ。その方が安全だ。それに俺も家を買うのに手金を払ったしな」

彦一は後悔した。即座に一蹴されたことがショックだった。相手から普段の親しさは消え、冷たい警戒心に変わった。《しまった。言うんじゃなかった……》。親しかっただけに、アッサリ断られて金の怖さを初めて知った。気持ちが寒々と冷えるのを覚えた。

職場の友達だった一人に高利貸しの息子がいた。彼の所なら商売だから、金利さえ払えば貸してくれるに違いない。利息を払うならお客さんだ。何も恥ずかしいことも遠慮することもない。彦一はその友達に、

「商売をしたいので金を貸して欲し

い」

と言うと、彼は快く、

「判った。僕が保証人になってやる」

と好意的だったのでホッとした。利息は月一割、一ヶ月分の利息を天引きして四十五万円を持って来てくれた。五十万円の借金である。

勤めていた会社で使っていた運送屋さんの主人が彦一にひどく好意的で、有機肥料の仕入れ先へ連れて行き、紹介してくれた。それだけではなく、商品の売り先まで教えてくれた。

意外だったのは商品の仕入れだった。金さえ払えば簡単に売ってくれるとばかり思っていたが、一俵五〇キロ入りの有機肥料を一八五円、五俵以上売ってくれる店はなかった。実に、彦一の信用は千円にも満たなかったのである。それも、二万円の保証金を渡してである。

世話してくれた運送屋さんは、

「知ってもらうため、各店に週に二度は顔を出せ」

と言った。顔馴染みにならないと売ってくれないからだった。

面識もない各店に、週一度でも出向くのは苦しかった。先ず、話題がない。

「こんにちは。毎度おおきに」

それだけで坐っていられなかった。大きな店は人数も多く、偉い人も多いので居づらかった。或る店などは特に入りにくくて、店の入口で何度も入ろうか止めておこうか右往左往した。

意を決してやっと入っても、野球や相撲などのスポーツ界のことを知らない彦一は話のキッカケもつかめなかった。黙って坐っているだけで、息が詰まりそうだった。でも、早く親しくなって売ってもらわねば、売るべき商品がない。売る商品がなければ商売にならないのだ。

やっと売ってもらった数俵の商品も、自分で駅まで運ばねばならなかった。当時、駅出し運賃が一俵八円位だったが、たった五俵では運送屋さんは行ってくれない。少なくとも数十俵以上でなくては。

運送屋さんで大八車を借りて自分で運んだが、悲しいかな今までそのような重い物を運んだことがない。積み荷のバランスが悪く、梶棒がピンと跳ね上がったり、重くて大八車が動かなかったり。冷や汗をかいて苦しくて泣きそうになった。

駅出しするには、国道を越えなければならなかった。道路は雨水を逃がすよう中央が高くなっている。非力な彦一は、数俵の肥料を積んで国道を横断することが出来ず、大八車は道の真ん中で行ったり戻ったりする。現在ほど交通量はないが、トラックが見える。一刻も早く渡らねば……、と焦れば焦るほど大八車は後戻りする。汗をかき、死力を奮り絞ってやっと渡ったと思うと、

「馬鹿野郎、危ないやないかッ！」

と運転手の怒声が飛んでくる。

彦一は渡りきった安堵と、運転手に怒鳴られた恥ずかしさで梶棒を離し、どっかり道路に座り込み、思わず泣いた。《なぜ俺だけが、こんな苦労ばかり……。俺は一体どんな悪いことをしたというのだッ！　友達の多くは背広を着て楽しそうに会社へ行っているのに。自分は草履履きで腰にタオルと手鉤の姿とは……》。涙で視野が潤み、口に入った涙は塩辛く、子供の頃の涙を思い出させるのだった。

ちびちび数俵ずつ売ってもらった肥料が駅に七、八十俵は積んである。これが貨車一台になったとしても、まだ売り先もない。彦一は悲しくて咽喉が痛くなった。俺の商売は成り立って行くのだろうか？　前途は真っ暗闇なのだ……。　（つづく）